



国際標準化あれこれ

三菱電機(株) 取締役会長／前(社)電波産業会会長 **野間口 有**



はじめに

今年3月ごろ、(社)電波産業会の若尾専務理事から20～30分講演してもらいたいというお話があり、「国際標準化」のテーマで連絡しておりましたが、それが1か月ほど前にITUクラブであることを再認識しました。私も研究所の所長をしていた関係から、ITUが電気通信の国際標準勧告作成機関であることを知っていましたので、本日は論語読みの論語知らずが論語の先生の前で論語を論じるようなお話になるかもしれないと恐縮している次第でございます。

標準化に対する認識の違い

私は研究所長をしていたときから国際標準は非常に大事だと思っていました。自分自身では標準化活動に携わったことはありませんが、ITUの関係で言いますと、MPEG、ファクス、暗号、第3世代の移動体通信、デジタル放送あるいは音声多重化等、いろいろ取り組んでおりましたので、研究所としても大いに応援していたわけです。先端的な技術開発の成果を、より多くの人に使うってもらうことは企業としても大変うれしいことですので重要視しておりました。

そのような中、2002年2月の小泉総理の施政方針演説以来、知財立国に向けた取組が全国的に広がりを見せ、2002年7月には「知的財産戦略大綱」という大変立派な大綱が決定されました。しかし、その大綱の中に国際標準という文言は全く出てきません。苦勞して生み出した知的財産を、国際標準としてこういうふうを活用し世界に打って出ようという視点が抜けているのではないかと思った次第です。

ちょうどそのころ、私は知的財産戦略本部の本部委員、総合科学技術会議の専門調査員になるように言われて、いろいろな会合に出るようになりました。その場で「知的創造サイクルのアクティビティを効率よく高めるには、国際標準になるような知的財産を生み出すことが必要である。あるいは国のプロジェクトではそこまでサポートするぞという視点を入れた取組をしようではないか」という話をさせていただきました。

驚いたことにアカデミアの先生方からは「標準というのはサイエンスの進歩を阻害するものである。むやみに標準を決

めるとその分野のサイエンティフィックな努力が止まってしまうので、うかつに知財戦略の中で国際標準など言うものではない」と反対されました。

また産業界と大学を行ったり来たりしている先生方からは「自分は平板状の電池が欲しいのに単1とか単2とか単3とかの円筒型に電池の標準を決めているものだから、自分のアイデアを具現化できない。何でもかんでも標準化することも考えものだ」という話も出てきました。平板状のものが欲しければ自分で作って、これがよいと示したらどうですかと言うと、先に標準を決めるから平板状のものが高くてしょうがないと言われ、なかなか標準の意味が正しく理解されていないという思いを何回も経験しました。

同時に長く標準に取り組んでこられた行政の人たちの話も聞いてみましたが、我が国は産業界も学界も含めて標準化に対する認識が低いのではないかと感じました。

先日ITUの前事務総局長の内海さんと対談させていただきました。話の端々から大変御苦勞されたことが感じられました。御本人は世界第一級のジェントルマンですから穏やかにお話しされていましたが、意味するところは大変厳しいようにかがいました。その時に『国連専門機関 (ITU) の事務総局長が“勝つ”ための国際交渉術教えます!』という著書いただきましたが、標準化の最前線で頑張られたNTTさんや産業界の方々が大変御苦勞されたのだなということ、戦略本部でのいろいろな場面を思い出しながら感じた次第です。また2005年に日本経団連でも知的財産委員会というのを作り、そこに三つある部会の一つに国際標準化戦略部会というのを設けました。これは産業界としても標準化にしっかり取り組んでいかなければいけないということの表れだと思っております。

我が社の標準化活動と標準化に対する新しい視点

私どもは電波産業会を通じていろいろな活動させていただいていますが、ITUとかIEC、ISOの領域で言いますと、暗号とかMPEG、DVDの委員会に委員を出したり、向こうから人を招聘したりしております。



また、古くから標準化活動を続けている重電関係では、日本の技術レベルが結構高かったので国際標準を作るときに、欧米と肩を並べて日本も協力しました。このような経緯もあり、現在もかなり積極的に活動しています。

人工衛星の電源としての太陽電池パネルについても、国際標準化の動きが活発です。電池パネルは重要な役割をするパーツであると同時に、いったん何かあると修理に行けないということから、地上でどういう評価をしておくかということが重要になります。そこで、世界の英知を集めて評価基準を作ろうということになっています。

世界中から質のよい製品・部品を調達するための基本条件として、このような国際標準の基準を定めようという動きが非常に活発になってきています。こういう動きは私どもの得意なファクトリーオートメーションとか、車関係の電気部品の方面にもどんどん広がっています。TBT協定が1995年にWTO協定に包含され、その厳格な適用を各国は求められていますので、ますます国際標準は重要になってくると思います。

国際標準化活動を活発化させるためには

国際標準化活動というのは大変時間のかかる活動だという意見が、いろいろなところから出てきます。私もそのとおりだと思うのですが、国際標準で頑張っている人を一企業、一機関という枠の中だけでなく、日本の社会全体で支えこれを利活用するような仕組みを考えていく必要があるのではないかと思います。

私は、定年を迎えた方々にもう少し残っていただいで頑張ってもらいたいと思っています。既に数名の方には御協力していただいています。これを日本全体に広めていって、中堅企業、中小企業でもそういうことができるような施策を考えていけばよいのではないかと思います。日本経団連の委員会でも、そういうことを大いに提言していきたいと考えています。

また、国際標準の仕事をしていても企業の中では評価されないから、企業人はあまり標準化にまじめに取り組まないとされています。今、日本経団連に「経済トレンド」という広報紙がございますが、今年から国際標準で頑張っている人のインタビュー記事を毎号掲載する予定です。いかに国際的な場で苦労したか、いかに経営に貢献したか、どんな失敗をしてどういう反省をしているかなどのお話とともに、活動して

いる人を紹介し国際標準化が経営にどれほど重要な役割を持っているかということ、明らかにしていきたいと取り組んでいるところです。このような取組を始めとして、企業の中で評価されないという意見がなくなるよう努力していきたいと思っております。

また、日本の場合、特に産学官連携でこの問題に取り組むことも必要だと思います。日本は情報通信にしろ、家電にしろ、他国に比べてメーカーの数が非常に多いと言われますが、これが日本の競争力の源泉でもあると思います。メーカーの数が多すぎるから合体してはどうかなどとも言われますが、数が多いからこそ競争力で粘り強さが出てくる面もあると思うのです。ただ、日本として提案するときに、意見が多すぎるために日本は足並みが乱れているという印象を与えることはよくないと思いますので、産学官連携でまとめる仕組みを作っていくべきだと思います。そこで、シニアの方も含めて日本全体でこの問題に取り組んでいる人を長期にわたってサポートするような仕組みを考えていけば、まだまだやりようがあるのではないかと思います。

このようにいろいろ努力しておりますので、標準化のお話がありましたときには御支援をお願いしたいと思います。国際標準について長年御苦労された皆さまの前で、実際に苦労した経験もない私がこんな話をするのは誠に失礼ではございましたが、日ごろの思いの一端をお話しさせていただきました。

御清聴ありがとうございました。

(2007年6月21日第357回ITUクラブ講演より)



ITUクラブで講演する筆者